魅了無効な転生令嬢は
美貌の王子の淫らな溺愛に囚われる

プロローグ

ドレッサーの鏡には、お人形のように愛らしい女の子が映っている。
顔立ちが端正なだけでなく、ふんわりとしたピンクの髪に琥珀色の瞳というパステルカラーの取り合わせがまた可愛らしい。
（今日も美少女だわ……）
鏡を覗き込んだエルシーがまばたきをすると、鏡の中の美少女も同じ仕草をした。
（これが自分の顔だなんて、時々信じられなくなるのよね）
エルシーはまじまじと自分を見つめた。
こうなっていることに気付いたのは今から八年前、十歳の時だ。
エルシーには、ここではないどこか別の世界にあった『日本』なる島国で、二十数年間生きた、いわゆる『前世の記憶』と呼ばれるものがあった。
平凡な人間が異世界に転生する――そういう設定の漫画やアニメなどの創作物は前世では大人気

だったが、まさか自分がその主人公になるとは思わなかった。
思い出したきっかけもベタだ。
当時流行っていたインフルエンザのような伝染病に罹って高熱にうなされていたら、突然前世の人生の記憶が一気に蘇ったのである。
あまりの情報量にエルシーは気を失った。
そして前世の記憶と今世――エルシー・ポーフォートの記憶が入り混じる夢を見た。
長い眠りの中でたくさんの夢を見て、目覚めた時には、前世の日本人女性とエルシー・ポーフォートが融合した新たな自分に生まれ変わっていた。

前世の記憶はかなり曖昧だ。
自分のことで覚えているのは、性別が女で若くして病死したくらいである。
大学で講義を受けている最中に倒れて救急車で運ばれ、そのまま緊急入院した記憶があるから、二十歳前後で亡くなったのではないだろうか。
ベッドの上で医師から余命数か月と宣告を受けて呆然とした。その情景がやけに鮮明に心に刻まれている。
それなのに普通にお腹が空いて、案外自分は図太く出来ていると驚いたのも。
だけど少しずつ体は悪くなっていって、いろいろな考えが頭の中をよぎった。

（どうして自分が）
（死にたくない）
（健康だった時に戻りたい）
――白い病室、たくさんの管に繋がれたガリガリに痩せた腕、思うように動かない重い体に突き刺さる激痛。
最期を思い出そうとすると、脳がセーブしようとするのか酷く頭が痛む。病名も具体的な症状も思い出せないが、おそらく進行の速い癌だったのではないだろうか。
ただ、一つだけ鮮明に覚えていることがある。
亡くなる直前にスマートフォンで読んでいた、『魅了の王子と没落令嬢』というタイトルの小説の内容だ。
それは、ヨーロッパ風の異世界を舞台とした恋愛小説で、エルシー・ポーフォートという名の伯爵令嬢が主人公だった。
――エルシー・ポーフォート。
今世の自分と同じ名前である。
（あの時はびっくりしたわ……）
高熱による長い眠りからようやく意識が戻って、心配して駆け付けた父親や使用人が大騒ぎする

中、エルシーは愕然とした。
父の名はリチャード。母は早くに亡くなっていて、イーサンという七歳下の弟がいる。
自分が生まれた国はグレンダール王国で、現在の国王の名前はゴードン二世……
十歳のエルシーが持つ情報と『魅了の王子と没落令嬢』の設定は全く同じだった。
そして小説の内容を思い返したエルシーは叫んだ。
「虐められるのもモブレも嫌っ！」
小説の中のエルシー・ポーフォートは没落した伯爵家のお嬢様で、この国の王太子、レナードと恋に落ちるが、そのせいでさんざんな目に遭っていた。
その最たるものがモブによるレイプ、略してモブレだ。
混乱して泣き出したエルシーに、周囲の人々は困惑していたが――高熱で頭がどうにかなったのではないかと思われたらしい――、それはまた別の話である。
（何はともあれ今日は勝負の日よ！　頑張れ、私！）
エルシーは、鏡の中の自分に心の中で話しかけた。
今日の自分はドレスアップしているので、いつもよりもさらに可愛い。
さすがは小説で美少女として描写されていたヒロインである。
（胸も大きくて魔力もチート級にあるなんて、なかなかの盛り盛り設定よね……）
十八歳の女性に『美少女』という表現はそぐわないような気もするが、目が大きくてかなり童顔

なのである。
初めて自分の容姿を見た時は前世ではありえないピンクの髪に驚いたが、見慣れた今はとても可愛い色なので気に入っている。
琥珀色の瞳も光の加減によって金色に見えてとても綺麗だし、顔もスタイルも抜群にいいので、エルシーは転生後の自分の容姿に大満足していた。
（そりゃあレナード殿下もころっと落ちるわ……）
小説の展開に逆らって、レナード王子を避けるつもりのエルシーは思わず遠い目をした。
どうしても虐めとモブレの場面が頭の中をちらつく。
貧しい没落貴族の娘なのに、王子様を射止めたエルシーは周りから嫉妬の集中砲火を受けた。
宮廷では聞こえよがしにひそひそされたり、足を引っかけて転ばせられたり、陰湿な嫌がらせの数々を受けて傷付き、泣いていた。
一番避けたいイベントであるモブレを画策したのは、この国の宰相だ。
自分の娘をレナードに嫁がせたいと考えていた彼は、エルシーを誘拐して金で雇った浮浪者に襲わせる。
（汚っさんどもに手込めにされるとかありえない！）
エルシーはその場面を思い出してわなわなと震えた。
小説のエルシーは薄暗く埃っぽい小屋の中で、臭くて薄汚れた複数の中年男に取り囲まれる。

そして口に汚(お)っさんAのブツを捩じ込まれ、背後に回った汚(お)っさんBにあわや純潔を……というところで、ヒーロー・レナードに救出されるのだ。
（何でもうちょっと早く助けに来ないのよ！）
小説の作者は初めてさえ奪われていなければいいと思ってそういう展開にしたのかもしれないが、口に汚物を突っ込まれている時点で自分的にはアウトである。
真の有能ヒーローなら、そもそもヒロインがピンチに陥ることがないよう、がっちりと守ってやるべきではないだろうか。
その後、性行為がトラウマになったヒロイン・エルシーを、ヒーロー・レナードが優しく癒して、初めて結ばれるシーンに繋がっていくので、小説の作者がこの場面を描写した理由はわからないでもないが――
（そんな簡単に上手くいく？　ギリ未遂だったかもしれないけど、そこまでされたら心の病気になりかねないよ……）
エンタメに現実を求めてはいけないのかもしれないが、あいにくエルシーは生身の人間だ。
こんな気持ち悪くて最低な展開には絶対に巻き込まれたくなかった。

「――せっかくの舞踏会なのに浮かない顔ですね、お嬢様」
声をかけてきたのは髪を結っていた侍女のサラだ。

「だって私、レナード殿下に興味ないもの……」
エルシーはむうっと膨れた。
「お妃様になれるかもしれないのに？　あんなに何もかもを兼ね備えた男性はほかにいらっしゃいませんよ！」
サラは力いっぱい力説する。
エルシーが美少女なら、その相手役のレナードもまた非常に見目麗しい人物だ。
金の髪に紫の瞳、美しく整った容貌にモデルのような体型――女子の理想と憧れを詰め込んだ容姿の持ち主である。
彼の顔立ちは、絵姿や、前世の皇室の一般参賀に該当するイベントなどで広く周知されている。
あまりにも見た目が優れているから、首都に住む若い女性の間では男性アイドルのような存在になっていた。
今日、王宮で開催されるのは、そんな彼の妻を選ぶための舞踏会だ。
王子様に見初められるのを夢見て、誰とも婚約せずにこの日を待っていた令嬢もいると聞く。
小説では、この舞踏会が、レナードとエルシーが初めて顔を合わせる場所として描かれていた。
「王太子妃ってそんなになりたい立場かしら？　周りを偉い人に囲まれて疲れるだけだと思うんだけど……。私は身の丈に合った人と結婚したいな」
エルシーはため息をついて肩を落とした。

「確かにおっしゃる通り、同じくらいの身分の人と結ばれるほうが楽かもしれませんね」
「そうよ！　王太子妃になったら家族に会うのも一苦労よ。どこに行くのも護衛がたくさん必要で、さっさと子供を産めって圧力もかけられるんだわ。それも王女じゃ駄目。跡継ぎになる男の子じゃないと。早めに授かればいいけど、そうじゃなかったら……」
この国、グレンダール王国は、日本人だった記憶を持つエルシーから見ると前時代的だ。
男尊女卑がまかり通っていて、王位も爵位も男性にしか相続権がない。
基本的に財産は長男の総取りで、女の子しか生まれなかった場合は婿か男の養子を取らなければならないと決まっている。
女性は高い教育も受けられないし、家長に従うものという価値観を誰もが持っている。
（前世の戦前みたいだわ）
エルシーは顔をしかめた。
「お嬢様、いくら気乗りしなくても、その顔はやめておいたほうがいいと思います。おでこに皺が定着しちゃいますよ」
サラに指摘され、慌てて顔の力を抜く。
険しい顔のおばあちゃんにはなりたくない。
するとサラはくすくすと笑いながら、手に持っていた宝石の付いたヘアスティックをエルシーの髪に挿し込んだ。

「こんな感じでいかがでしょうか？」
「いいと思うわ」
エルシーは左右に頭を動かして、髪全体を確認してから頷いた。
編んだりねじったり、どうなっているのかさっぱりわからないが、凝っていてとても可愛い。不器用なエルシーには絶対に自分でできない髪型である。
「では旦那様のいらっしゃる部屋に移動しましょうか。首を長くして待っていらっしゃいますよ」
「そうね。サラ、綺麗にしてくれてありがとう」
小説の開幕を告げる舞踏会に行くのは嫌だが、お洒落をするのは純粋に楽しい。
エルシーはサラに感謝の気持ちを伝えてから立ち上がった。

第一章　舞踏会

（小説とは経済状態が全然違うから大丈夫のはず……だよね）

エルシーは父がいる部屋へ向かう道すがら、屋敷の中を見回した。

ここは、エルシーの生家であるポーフォート伯爵家が、首都に所有する屋敷――タウンハウスである。

大抵の貴族がそうであるように、エルシーの家族も、首都のタウンハウスと領地にあるカントリーハウスとを行き来している。

秋から翌年春にかけての社交期は首都で、それ以外の時期は領地で生活するのがこの国の貴族の習わしだ。

『魅了の王子と没落令嬢』でのポーフォート伯爵家は困窮した没落貴族で、戸建てのタウンハウスを維持する財力などなく、集合住宅の一角を間借りしていた。

しかし、現実は違う。

今のポーフォート伯爵家はかなり潤っていて、先祖伝来のタウンハウスを維持し、歴史ある名門貴族としての体面を保っている。

（何とか没落を防げてよかった……）

エルシーは安堵の息をつく。

実は前世の記憶を取り戻した時、すでにポーフォート伯爵家の財政は傾きかけていた。

だから、前世にありふれていた物――ティッシュとトイレットペーパーをこの世界に持ち込んだのである。

それらは現在ポーフォート紙という名前で流通しており、大ヒットしている。

（鼻をかむのに布を使っていたからビックリしたのよね）

これは人気が出る商売になる発明品だろうと思ったので、父親に『こういうのが欲しい！』と訴えてみた。

実現は案外簡単だった。元々ポーフォート伯爵領は製紙業が盛んだったからだ。

『柔らかくて薄い紙で作った使い捨てのハンカチがあれば売れるんじゃないでしょうか！　鼻をかむ以外にもお化粧を落としたり、ちょっとした掃除にも使えると思いますので！』

――と力説し、いろいろと試行錯誤して作ってもらったら飛ぶように売れた。

そして、そのおかげで没落しかけていたポーフォート伯爵家は持ち直した。

（タオルとかファスナーとか、商売のネタになりそうな物はほかにもあるんだけど……。日本の知識をこれ以上持ち込むのは絶対よくない！　私は目立ちたくない……）

有用な発明は、一つだけなら偶然の思い付きで済むが、二つ三つと続くと絶対に変に思われる。

そうなったらレナードの目に留まってしまうかもしれない。
彼が誰もが憧れる王子様で、何もかも持っている人物なのは間違いないが、妬み嫉みや権謀術数が渦巻く王宮に入るなんて断固としてお断りである。
エルシーが望むのはもっと堅実かつ平凡な幸せだ。
貴族である以上政略結婚は避けられないが、同じくらいの身分で歳の近い男性と結ばれ、良好な関係を築くのが一番だと思う。
見た目も普通でいい。理想はちょっと格好いいなと思うくらいだ。
レナードのレベルまで行くと駄目だ。他人の嫉妬の対象になる。
エルシーは貴族の中でもまずまずの家に、恵まれた容姿を持って生まれてきた。
優しい旦那様と相思相愛になって健康的に長生きし、寿命で天に召されるまで幸せに暮らすのがエルシーの目標である。
（まあ、それはそれで結構な高望みかもしれないんだけど……）
エルシーは自分の衣装に視線を落とした。
深みのあるワインレッドのドレスは、収穫祭を間近に控えた今の季節――秋を意識して仕立てたものだ。
王宮の舞踏会に参加するので伯爵家の体面がかかっている。そのため父は、仕立ての予算に糸目を付けなかった。

小説でエルシーが最初にレナードの目に止まったのは、ＴＰＯにそぐわない時代遅れのドレスを身に着けていたせいだ。
今日の装いは年頃の令嬢らしく華やかだが、あくまでも身分相応で会場で悪目立ちするほどではないはずだ。
それでも、人口の大多数を占める平民には高価すぎて一生縁のない代物である。
一度裕福な生活を体験すると、人間なかなか質を落とせなくなるものだ。現在の、綺麗なドレスや宝石に囲まれて使用人に傅かれる生活は、できれば手放したくない。
（これは人として自然な欲求だから仕方ないのよ）
エルシーは理想をそう結論付けると、父、リチャードが待つ居間へと足を踏み入れた。

「今日も綺麗だね。僕のお姫様」
中に入ると、正装に身を包んだリチャードが早速エルシーに声をかけてきた。
エルシーと同じピンクの髪に琥珀色の瞳を持つ父は、四十五歳という実年齢よりもずっと若々しくて格好いい。
もう一人の家族、弟のイーサンは現在全寮制の男子校に通っているので不在である。彼は特別な事情がない限り、夏と冬の長期休暇の時しか帰ってこない。
「もしかして、かなりお待たせしちゃいましたか？」

エルシーはリチャードに尋ねた。
すると父は首を横に振る。
「女性のドレスアップには時間がかかるものだとわかっているからね。思っていたより早いくらいだ」
リチャードは読みかけの本をテーブルに置くと、ソファから立ち上がってこちらにやってきた。
「少し早いけど、エルシーの準備ができたのなら出発しようか。出遅れると馬車を停めるのが大変になってしまう」
「そうですね」
エルシーは同意すると、差し出されたリチャードの手を取った。

◆◆◆

王宮に向かう馬車の中で、エルシーは『魅了の王子と没落令嬢』の導入部分を思い返した。
小説の中のエルシーは、逼迫した家計のせいでドレスを新調できなくて、母の形見のドレスを着て舞踏会に出席していた。
手直しでどうにかなるようなデザインではなく、エスコート役の父が席を少し外した途端に、エルシーは意地の悪い令嬢から馬鹿にされて赤ワインを引っかけられる。
そこに現れた救世主がレナードだ。
彼には招待主(ホスト)として招待客全員をもてなす義務があった。
それを果たすために、揉め事の気配を察して場を収めに来たのである。
「そのドレスでは帰れないでしょう。着替えの手配をいたしますので、どうぞこちらへ」
「あ、ありがとうございます……」
エルシーは頬を染め、レナードと一緒に会場を後にする。
その道すがらレナードはエルシーに質問する。
「ずいぶんと年代物のドレスですが、大切にされていたものなのですか?」
「……はい。亡くなった母のものです。古いドレスなので悪目立ちしていましたよね……。ですが、当家の経済状態ではこれを準備するのが精一杯で……」
エルシーは恥じ入りながら返事をする。
その時に全く視線が合わなかったことが原因で、エルシーはレナードに目を付けられてしまうのだ。
(候補に選ばれたら全員強制参加ってどうなの? 家の状況も考えた上で招けばいいのに……。魔術や魔力がある世界だから仕方ないのかな……)

ついでに魔獣なるファンタジーな存在も生息している世界である。
レナードの妃候補としての条件はただ一つ。
一定以上の魔力を持っていることだ。これは、王家として次の代に高い魔力を引き継がせるために定められたものである。
この世界の権力者は優秀な魔術師同士の婚姻を繰り返してきた。そのため、どの国でも、王侯貴族の家系には遺伝的に魔力が高い者が生まれやすい。
魔術は国を支える礎(いしずえ)なので、官吏や軍人はほぼ貴族出身者で占められている。
特に王族は国の守護者だ。魔獣が王国の土地と財産を荒らしに来たら、率先して兵を率いて戦う義務がある。
この世界では、なぜか治癒魔術は女にしか適性がないため、戦いは男の仕事とされている。
男は攻撃魔術を、女は治癒魔術を中心に習得するのだ。
エルシーも治癒魔術の使い手であり、貴族の義務として定期的に病院で奉仕活動を行っている。
そして王太子であるレナードは、現在、国一番の魔力の持ち主だ。彼は王族の祖先だと伝えられている天空神フォルティナの再来と言われるほど強い魔力を持って生まれた。
しかし、この神返りの魔力には弊害もあった。
人を魅了してしまうのである。
小説では、魅了の対象は老若男女問わないが、女のほうがより強く効果が出ると書かれていた。

成長してある程度魔力を制御できるようになるまで、レナードとその周囲は大変だったそうだ。
誘拐されそうになったり、性的に襲われそうになったり、過去にいろいろとあったらしい。
(だから小説のタイトルは『魅了の王子と没落令嬢』なのよね……)
国民を混乱させる可能性があるので、レナードが魅了の魔力を持つことは伏せられている。
小説の中では、彼は品行方正で人当たりはいいが、他人に対して心を閉ざしている青年として描写されていた。
というのも、魔力を抑えられるようになってからも魅了の効果が出なくなったわけではなく、程度が和らいだだけで、誰もがレナードに惹き付けられるからだ。
影響を受けないのは、遺伝的に彼と魔力の性質が似ている近親者だけという状況だった。
だから彼は、自分と視線を合わせようとしないエルシーを見た時に、『魅了の魔力が効かない特別な存在なのでは?』と疑問を持った。
レナードは、その日から積極的にエルシーとの交流を始める。
そして、疑惑が確信に変わったタイミングで自分が魅了の魔力を持っていることをエルシーに告白し、原因を探るために魔術研究所へと向かう。
そこでさまざまな検査を受けた結果、エルシーにはレナードに匹敵する潜在魔力があると判明する。実にヒロインらしい設定である。
(その魔力、私にもあるのかな……?)

エルシーは自分の手の平をこっそりと見つめた。
もしかしたら小説の設定通りかもしれないが、一般的な検査しか受けたことがないからわからない。
ちゃんと自分の魔力を調べないのは、日本にあった便利な物を必要以上にこちらで再現しないのと同じ理由だ。
強力な魔力があるなんてわかったら、即座にレナードの妃コースである。
突出した能力は必ずしも幸せをもたらすものではないことを、人生二周目のエルシーは知っているのだ。

◆◆◆

舞踏会の会場である大広間に入ったエルシーは、ほかの令嬢の格好を見てホッと安堵した。
（よかった。悪目立ちはしていない）
招待客は全部で二十組ほどだろうか。皆、負けず劣らず煌びやかな装いをしている。
また、エルシーは小説のヒロインに相応しい容姿の持ち主ではあるが、社交界にはハイレベルな美人が溢れている。
（権力者は綺麗な人と結婚するものね……）

両親の遺伝で容姿端麗な子供が生まれ、財力でその容姿をさらに磨き込むのだから、ある意味当然かもしれない。
会場内には、清楚系、可愛い系、妖艶系など、バリエーションに豊んだ美しい女性がそこかしこでざざめいていた。
木を隠すなら森の中である。
これなら立ち居振る舞いに気を付ければ、あまり目立たずに済みそうだ。
「エルシーは殿下には興味がないと言っていたけど、実際にお目にかかったら意見が変わるかもしれないよ。とても魅力的な方なんだ。気が付いたら目が惹き寄せられるんだよね」
リチャードが話しかけてきた。
「そんなに素敵な方なんですね」
（それは抑えても漏れ出している魅了の魔力の効果だと思いますよ、お父様）
エルシーは返事をしながら心の中で反論した。
小説では、他人の注目を常に集めて全肯定されるのがレナードの日常と書かれていた。
だからこそ彼の魅了の効かないエルシーは、彼にとって唯一の番（つがい）のような存在になっていったのだろう。
今年成人年齢である十八歳を迎えたばかりのエルシーにとって、この舞踏会が社交デビューだ。
初めて王族に拝謁するのかと思うと緊張でお腹が痛くなってきた。

小説の展開通りには絶対になりたくないのでなおさらである。

リチャードに連れられて、ポーフォート伯爵家と関係の深い貴族に挨拶していたら、ファンファーレが響き渡った。王族の入場を知らせるものだ。

会場内の全員が頭を下げる中、ゴードン二世とアイリス王妃、そしてレナードが入ってきた。

「皆、楽にしてほしい」

ゴードン二世が声を発すると、全員が顔を上げ――吸い寄せられるようにレナードに注目した。

初めて間近で見たレナードは、世間に流通している絵姿よりも煌びやかで周囲を圧倒するオーラがあった。

金髪に紫の瞳という取り合わせが実に華やかである。

また、顔だけでなく長身でスタイルもいい。

気が付いたらエルシーも彼に見惚れていた。

(うーん、でも、目を逸らそうと思えば普通にできるわね……)

――ということは、やはり自分には特別な魔力があるのだろうか。

いや、まだ断定はできない。小説には、彼の魅了の魔力が真の威力を発揮するのは至近距離で対面した時と書かれていた。

(おそらく順番に挨拶に来るはずだから、その時は気を付けないと)

目を逸らすことができたとしても、やってはいけない。

小説ではそれが原因でレナードの執着が始まるのだから。

エルシーは小説の設定を改めて思い返して気合を入れた。

国王の挨拶が終わると、レナードはエルシーの予想通り招待客に近付いて言葉をかけはじめた。

エルシーはほかの令嬢の真似をして、ぼうっとレナードに見惚れているフリをする。

『魅了の王子と没落令嬢』の設定が頭の中にある状態で会場内を観察すると、誰も彼もがレナードに注目している光景はかなり異様に見えた。

そして、彼が家格順に声をかけているのに気付いて、同情めいた感情が湧く。

(王子様も大変ね……。うっかり順番を間違えたら後が面倒臭そう)

理由を邪推されたり陰で文句を言われたり、想像するだけでもゾッとした。

「エルシー、殿下はどうかな……?」

リチャードがおそるおそる尋ねてきた。

「お噂通りとても素敵な方ですね……。もし選んでいただけたら嬉しいです」

内心を隠してうっとりしている演技をしながら答えると、リチャードは誇らしげな表情をエルシーに向けてきた。

(普通男親って、こういう場面では面白くない感情になると思うんだけど……)

リチャードは政治的な野心の薄い人物である。領地と家族を守れたらそれでいいという考え方の持ち主だ。
そんな父がこういう反応を見せるということは、小説の設定通り、レナードが魅了の魔力を振りまいている証拠のように思えた。
（ごめんなさい、お父様。私、王子妃にはなりたくないです！）
エルシーは心の中でリチャードに謝った。
この舞踏会は、なかなか婚約者を決めようとしないレナードに、しびれを切らした国王夫妻が開催したものらしい。これという女性が見つからなかったら、魔力量と家格を総合的に判断して上位の令嬢が順当に選ばれるはずだ。
ちなみに最有力の候補は、小説の中でエルシーのモブレイプを画策した宰相の娘である。

ポーフォート伯爵家は招待客の中では末席のほうにあたる家柄なので、レナードがエルシーのところにやってくるまでかなり待たなければいけなかった。
その間、エルシーは再び父から親しくしている貴族を紹介される。
この場にいる令嬢は、王子だけでなく未婚の貴公子にとっても、身元や魔力量が保証されたお嫁さん候補である。
エルシーの場合、弟がまだ幼いのでエスコート役は父だが、未婚の近親者がいる家の令嬢は若い

青年にエスコートされていた。
いわば婚活パーティ状態なので、自然とエルシーも気合が入る。
（どなたか良さそうな人……！）
小説の展開から逃げ出す一番の方法は、さっさと別の人と結婚することだ。
エルシーは、ほかの令嬢の態度を真似してレナードの動向を確認しながら、父が紹介してくれる男性達を品定めした。
相手からもこちらを値踏みするような気配を感じるが、お互い様なので気にならない。
そうこうしているうちに、レナードがこちらに近付いてきた。
（やだ。もう来ちゃった）
エルシーは慌てて夢見る乙女の顔を作ると、レナードにうっとりした視線を向けた。
「こんばんは、リチャード殿」
まずレナードは、すでに面識のある父に声をかけてきた。
「お声がけいただきましてありがとうございます、レナード殿下。紹介します。娘のエルシーです」
リチャードは陶然とした笑みをレナードに向け、エルシーを彼に紹介した。
「初めまして、エルシー嬢」
「はっ、初めまして、レナード殿下。お会いできて光栄です……！」

返事をしながら、エルシーは落胆した。
全然余裕で目を逸らせる。
レナードを見ても『目の保養になる』という感想しか出てこない。
やはり小説の設定通り、彼の魅了はエルシーには効果がないようだ。
（……ということは、私にはやっぱりすごい魔力があるのね）
――ならば、その事実は墓場まで持っていかなければ。
エルシーは決意を新たにした。
「リチャード殿がよくエルシー嬢の自慢をしていたから、すでに会ったことがある気がします。ポーフォート紙の考案者はあなただと聞きました。俺も愛用しています」
レナードはエルシーに微笑みかけてきた。
（お父様の馬鹿！　余計なことを……）
「わ、私は思いつきを口にしただけなんです。すごいのはそこから試作品に向けて動いてくれた父です」
エルシーはリチャードを呪いながら答えた。
回答自体は本心だ。
子供の駄々に近いおねだりを真剣に受け止めて、よく実現してくれたものだと思う。
エルシーの発言をまともに取り合わない親だったら、ポーフォート紙は製品化できていないし、

没落も避けられなかったかもしれない。
「エルシー嬢は謙虚ですね。模倣品が出回った時にウェットポーフォート紙を発案したと聞いていますが……。どうやら商才があるようだ」
「そっ、そんなことはありません！　すごいのはやっぱり実用化に向けて動いてくれた人達で……」
ウェットポーフォート紙――ウェットティッシュである。
こちらも模倣品が出回りはじめたので、そろそろローションティッシュの提案をしようかと思っているところだ。
（どうしよう。没落を避けるための行動のせいで、もしかして私、目を付けられた……？）
「ご趣味は何ですか？」
「刺繍です」
「どんな作品を作られるんですか？」
「ハンカチに家紋を入れたり、庭の草花をモチーフにしたり……」
エルシーはできるだけ平均的な令嬢に寄せた面白みのない回答を心がけた。
（お願い、早く解放して……）
「――今日は招待に応じてくださってありがとうございました。楽しんでいってください」
祈りが通じたのか、ようやくレナードは次の令嬢に向かってくれた。
（無事切り抜けられたということでいいのかな……？）

エルシーは残念そうな表情を作って彼の背中を見送りながら、心の中で胸を撫で下ろした。

◆◆◆

招待客全員がレナードと会話を交わし終えたタイミングで、一曲目のダンスが始まった。
レナードがファーストダンスの相手に選んだのは、宰相の娘、フィオナだった。
彼女は銀髪に水色の瞳を持つ、氷の精霊のような美女である。
正統派の王子様であるレナードと並んだ姿はとてもお似合いだった。
フィオナは微かに頬を染め、嬉しそうにレナードとワルツを踊っている。レナードもまんざらではなさそうだ。
それを見て、エルシーは本格的に安堵した。
(よし、これでひとまず今日のミッションは成功よ!)
「これは順当にフィオナ嬢で決まりかな……。残念だったね、エルシー。ポーフォート紙の話をしている時はいけるかもと思ったんだけどな……」
リチャードはがっかりとした表情で肩を落とした。
「お父様、私は気にしていません。嫁ぎ先はお父様が良い方を探してください。できれば優しくて誠実で、頻繁に里帰りをしても嫌な顔をしない人がいいです」

「わかったよ、僕の可愛いお姫様。僕もエルシーに会えなくなるのは嫌だからね」
自分でも一応は探してみるが、見つけられなかった時はリチャードに頼るつもりだった。
父はエルシーを溺愛しているから、変な男に嫁がせようとはしないはずだ。
貴族の娘として、自由に結婚できないことはわかっている。
(男性を見る目にはあまり自信がないのよね……)
曖昧な前世の記憶を探っても、登場するのは家族や女友達ばかりなので、おそらく特別な関係の異性はいなかったのではないかと思う。
「そんなことよりもお父様、私をダンスに誘ってください! ファーストダンスは、できればお父様と踊りたいなと思っていたんですから」
「あ、ああ。じゃあ踊ろうか、エルシー」
リチャードは意表を突かれた表情をしたが、すぐに笑みを浮かべてエルシーに手を差し出した。
エルシーは今世の家族が大好きだ。前世を思い出してからはよりその感情が強くなった。
かつて両親よりも先に病魔に倒れて悲しませたことが、心の中に棘のように突き刺さっている。
今世の母親は残念ながら早くに亡くなってしまったけれど、その分もリチャードを大切にするつもりだ。
エルシーは父に向かって微笑みかけると、差し出された手を取った。

◆◆◆

豪奢なシャンデリアに高名な芸術家の手による美術品、調度品は言うに及ばず、王宮の大広間はこれでもかというくらいに煌びやかだ。
レナードがフィオナと一緒にいてくれるおかげで、ようやくエルシーは周囲を見渡す余裕ができた。
（シンデレラの舞踏会はこんな感じだったのかな？）
ダンスのパートナーは王子様ではなくて父親だけど、リチャードは身内の贔屓目を差し引いても普通に格好いいし、何度も練習相手を務めてもらったから気心も知れている。
父とのダンスは足を踏んでも笑って許してもらえる。失敗を恐れる必要もなく、のびのびと踊れるからとても楽しかった。
「そろそろいいかな、お姫様」
二曲連続で踊ったところで、リチャードは許しを乞うてきた。
「はい、とてもいい思い出ができました」
エルシーはにっこりと微笑みかけた。
そして、父のエスコートを受けて壁際へと移動する。

しかし、その途中でリチャードが頭を押さえた。
「お父様？」
「すまない、少し目眩が。酔いが回ったかもしれない」
「大丈夫ですか？」
そういえば顔見知りへの挨拶回りの時に、リチャードはアルコールを口にしていた。
エルシーを褒められて嬉しくなり、いつもより多く飲んでいたかもしれない。
よく見たら父の顔は全体的に普段よりも赤かった。
（もう、お父様ったら……）
さっさと何事もなく帰りたいエルシーにとっては予想外のハプニングである。
苦情を申し立てたい気分だったがぐっと我慢し、エルシーは父の背中に手を回した。
すると、すぐに異変を察知した王宮の男性使用人が声をかけてきた。
「どうかなさいましたか？」
「少し酔いが回ってしまったようです」
エルシーが答えると、使用人は眉をひそめた。
「それはいけませんね。休める場所にご案内します」
「お父様、歩けますか？」
「ああ」

リチャードは頷いた。
エルシーは彼の背中に手を添えたまま、使用人の先導に従った。
案内されたのは大広間を出てすぐの部屋だ。
「こちらはゲストの休憩用にご用意している部屋です。どうぞゆっくりとお過ごしください」
「ありがとう」
エルシーは礼を言うと、リチャードをソファに座らせた。
使用人が室内にあらかじめ設置している水差しからグラスに水を汲み、リチャードに差し出しながら声をかける。
「念のため、医師を呼びましょうか？」
「いや、少し休めば回復すると思う」
リチャードは力なく微笑むとソファに背中を預けた。
「では、何かございましたらベルでお呼びください」
王宮の使用人はそつがない。綺麗に一礼すると部屋から出ていった。
室内は魔道具の暖房が効いていて暖かかったが、少し空気がこもっているような気がした。
魔道具とは、魔力を動力とする便利な道具のことである。そのおかげで現代日本ほどではないが、こちらの生活は案外快適で文明的だ。特に入浴の習慣があってトイレが清潔なのは、元日本人の感覚を持つエルシーには幸運だった。

「お父様、少し換気しますね」
エルシーはリチャードに声をかけてから、窓際に移動した。
少しだけ窓を開けると、ひんやりとした空気が室内に入ってくる。
だが、同時に――
「嫌っ！　離して兄様！」
「うるさい！」
バチン！
そんな声と音が聞こえてきて、エルシーは目を見張った。
よく見ると、窓の外にある茂みの向こう側に、女性に圧（の）しかかっている男の姿がある。
「何やってるの⁉」
エルシーは気が付いたら声を荒らげていた。
直後、背後からベルの音が響き渡った。
驚いて振り返ると、リチャードが使用人を呼ぶためのそれをかき鳴らしていた。
すると視界の端に、庭木の狭間から逃げていく人影が見えた。
「この……！」
エルシーはカッとなって反射的に魔力を練り上げ、《魔力弾（エナジーボール）》の術式を構築すると男に向かって放出した。

純粋な魔力を弾丸として射出するこの魔術は、誰もが習得している基本の攻撃魔術だ。治癒魔術を中心に習得する女性であっても護身のために学ぶ。
『学ぶことを許されている』と言い換えるほうが正しいだろうか。
こちらの世界の人には、戦いは男性の役目という強い意識があり、女性が高度な攻撃魔術を習得しようとすると『女の癖に』と異端者を見る目を向けられるのだ。
エルシーは小説の展開を避けられなかった時に備えてしっかりと攻撃魔術を学びたかったが、目立ちたくなかったので断念した。
だから代わりに《魔力弾（エナジーボール）》を極めることにした。
術式の構築速度や威力、命中率を上げるために根気よく練習を繰り返したのである。
その成果が出たのか、瞬時に構築して放った《魔力弾（エナジーボール）》は、狙い通り逃げていく男に命中した。
男はもんどりうって地面に転がる。
「どうかなさいましたか⁉」
同時に、室内に複数人の使用人が飛び込んできた。
リチャードが激しくベルを鳴らしたから、ただならぬ気配を察したのだろう。
「すぐそこで女の人が男に襲われていました。大きな声を出してベルを鳴らしたら男が逃げたので咄嗟に《魔力弾（エナジーボール）》を……」
事情を使用人に説明しながらエルシーは青ざめた。

（まずいわ。やりすぎたかも……）
頭で考えるよりも先に体が動いていたので、威力の調整ができなかった。
（あんまり魔力は込めてないのよね。たぶん吹っ飛ばしちゃっただけだと思うんだけど……）
命さえあれば治癒魔術で治せるとはいえ、大怪我をさせたかもしれないと思うと急に恐ろしくなった。

◆◆◆

その後、わらわらと駆け付けてきた使用人やら近衛兵によって、外で何が起こっていたのか明らかになった。
襲われていた女性は、レナードのファーストダンスの相手を務めたフィオナ・ライセットだった。
彼女を襲ったのは、エスコート役を務めていた青年だ。フィオナは父親の都合が付かなかったので、キース・ライセットという名の父方の従兄と今日の舞踏会に参加していた。
キースは、フィオナがレナードの最有力の妃候補とはわかっていたが、ずっと彼女を想っていたらしい。そしてレナードがなかなか相手を決めようとしなかったので、このままフィオナは選ばれないのではないかと期待を募らせていた。
しかし、今日の舞踏会でほかに良い女性が見つからなかったのか、レナードは順当にフィオナを

ファーストダンスのパートナーに選んだ。
その姿を見て、どうしても気持ちを抑えられなくて凶行に及んだそうである。
「エルシー嬢が気付いて助けてくださらなかったら、どうなっていたか……ありがとうございます」
震えながらエルシーに感謝するフィオナの姿は、元がとても綺麗なだけに痛々しかった。
叩かれた頬が腫れ上がっているし、ドレスは胸元が引き裂かれている。
「いえ……。できればお怪我をする前にお助けできればよかったんですけど……」
エルシーの発言に、フィオナはハッとした表情になった。
「お見苦しい姿をお見せして申し訳ございません」
謝罪すると、彼女は自身に治癒魔術を使った。
「見苦しいだなんて……。大事に至らなくて本当によかったです」
(性犯罪者はあそこがもげればいいのよ)
エルシーは心の中でキースを罵倒した。
彼はエルシーの魔術で吹き飛ばされ、悶絶しているところを近衛兵に捕縛された。
命に別状はなく、背中にかなり大きな痣ができただけで済んだようだ。
エルシーはホッとした一方で落ち込んだ。
(無駄に目立ってしまったわ……)

肩を落とした直後だった。
「フィオナ嬢が襲われたというのは本当なの?」
室内がざわついたかと思うと、よく通る女性の声が聞こえてきた。
そして唯一の出入り口であるドアからエルシーとフィオナがいる場所まで、すっと人が道を開ける。その向こう側に立っていたのはゴードン二世の配偶者でレナードの母親――アイリス王妃だった。
王妃は真っ直ぐにこちらにやってくると、フィオナに声をかけた。
「フィオナ嬢、大変な目に遭ったと聞きました」
「いえ……。あの、すぐにそちらのエルシー嬢が助けてくださったので……」
フィオナはドレスの破れた箇所を腕で隠しながらエルシーに視線を向けた。
「それも聞いているわ。魔術で逃げる暴漢の足止めをしたそうですね」
王妃もエルシーに視線を向けた。
「勇敢なのね。こんなにも可愛らしい方なのに……」
「えっと、無我夢中で……。恐縮です」
「エルシー嬢がこちらのお部屋にいらっしゃらなかったらと思うと、ぞっとします」
王妃だけでなくフィオナからも賞賛の目を向けられ、エルシーはこの場から逃げ出したい気持ちに駆られた。

◆◆◆

まだ舞踏会は続いていたが、会場に戻るつもりにはなれなかったので、エルシーとリチャードは一足先に帰らせてもらうことにした。

「酔っ払ったせいであちこちに迷惑をかけてしまったけど、結果的にはよかったのかな」

馬車の停車場に向かう道すがら、リチャードはぽつりとつぶやいた。

父の酔いはいつの間にかすっかり醒めたようで、しっかりした足取りで歩いている。

「お父様のおっしゃる通りだと思います。私達があの部屋にいなければ、フィオナ嬢を助けられませんでした」

「……エルシーが不審者に立ち向かったのは勇敢だったけど、父親としては叱らないといけないな。一歩間違えたらこちらが襲われていたかもしれない」

「はい。確かにその通りだと思います」

エルシーは眉を下げた。

あの場合、人を呼びに行くのが正解だったと思う。カッとなって手を出したのは、今思い返してもよくなかった。

「立派だったとは思うよ。よくあの暗闇の中で魔術を当てられたね」

「たまたまです。私も命中するとは思いませんでした」

謙遜しながら建物の外に出ると、雨が降っていた。

「エルシーはここで待っていて。馬車を回してもらう」

リチャードはそう告げると、ポーフォート伯爵家の馬車を目指して走っていった。

エルシーはありがたく屋根のある場所で待たせてもらう。

(さむ……)

秋口とはいえ、夜になるとぐっと気温が下がる。天候が悪いとなおさらだ。

エルシーはぶるりと震えた。

その時だった。誰かが近付いてくる足音が聞こえてくる。

エルシーは音の方向を見て反射的に顔をしかめた。

(王子!? 何で……?)

足音の主はレナードだった。

「間に合ってよかった!」

彼はそう言いながら小走りで近付いてきた。

エルシーは慌てて表情を取り繕った。

「レナード殿下、どうしてこちらに……?」

「母から庭で起こったことについて聞きました。せっかくお越しいただいたのに、不快な思いをさ

れたのではないかと気になりまして……」
「気にかけていただいてありがとうございます。不快な思いはしておりませんのでご安心ください。フィオナ嬢を助けられたので、本当によかったと思っています」
王宮で起こった事件だから、王家の監督不行き届きと言えるのかもしれない。
アイリス王妃からも似たような言葉をかけられたが、偉い人から頭を下げられるといたたまれない気持ちになる。
「もしよろしければ、日を改めて王宮にお二人をお招きしてもいいでしょうか？　ちょうど秋薔薇が見頃なんです」
「まあ、本当ですか？　嬉しいです！」
（か、関わりたくないのに……！）
エルシーは喜ぶ演技をしつつ返事をしたが、心の中で悲鳴を上げた。
そこにリチャードを乗せたポーフォート伯爵家の馬車がやってくる。
「殿下？　どうしてこちらに……」
馬車から降りてきたリチャードは目を丸くした。
「リチャード殿。エルシー嬢とあなたに謝罪をしようと思い、見送りに参りました。それと、今日の埋め合わせになるかどうかはわかりませんが、お二人を改めてこちらにお招きしたいと思いまして。エルシー嬢は今日がデビューですよね？　事件に巻き込んでしまったことが申し訳なくて」

レナードの発言を聞いたリチャードはぱあっと顔を輝かせる。
「よろしいのですか？　ぜひ！」
（そ、そうなるわよね。普通に考えたら……）
エルシーは顔を引き攣らせた。

第二章　秋薔薇の庭園

舞踏会の翌日、レナードは約束通り、リチャードとエルシー宛てに王宮への招待状を送ってきた。
「日中のティーパーティーだし、僕は遠慮するよ」
リチャードが余計な気を回してくれたせいで、エルシーは一人で出かける羽目になった。
（お父様の馬鹿！　禿げちゃえ！　いえ、禿げは駄目だわ。お父様には素敵な老紳士になってほしいもの……。次に爪を切る時に深爪になりますように……）
エルシーは心の中でリチャードに呪いをかけながら出かけた。
王宮に着くとレナードが玄関ホールで待機しており、にこやかに声をかけてきた。
「こんにちは、エルシー嬢」
「レナード殿下、お招きくださいましてありがとうございます」
エルシーは恍惚とした表情を作ると、レナードに向かってお辞儀をした。
「先に庭を案内しようと思っているんですが、いかがですか？」
「はい。ぜひお願いします」
エルシーは差し出されたレナードの腕に手を添えた。

リチャード以外の男性からエスコートされるのは初めてである。エルシーは緊張しながら彼に付いて歩く。
（背、高い……。それにいい匂いもする……）
レナードからは爽やかな香りが漂ってきた。
（いや、この顔で悪臭が漂ってきても困るんだけど……）
彼は今日も大変麗しい。
煌めく金髪にアメジストのような紫の瞳という華やかな取り合わせもさることながら、顔だけでなく体つきも、女子の理想を詰め込んだかのような姿をしている。フロックコートがよく似合っているが、彼が身に着ければたとえ庶民の作業服でも格好良く見えるに違いない。
（観賞用としては最高よね……）
仮に彼に選ばれたとしても、美形すぎて気後れする。
改めて至近距離でレナードを見ても、そういう感情しか浮かばない。
エルシーにはやはり彼の魅了の魔力は効かないようだ。
そして、やっぱり小説の展開通りになるのはごめんだと改めて思った。
だが小説には、彼との距離を詰めていくエピソードの中に庭園でのデートがあった気がする。
（まさか強制力が働いているなんて……、ないわよね）
前世のエルシーは闘病中に小説や漫画を読みふけった。

その中には、ゲームの世界に転生した主人公が悲惨な運命に抗おうと奮闘するが、どんなに頑張っても謎の力が働いて、シナリオ通りになってしまうというストーリーもあったはずだ。
(そんなの嫌だ！　ホラーじゃない！)
エルシーはぞくりとして身を震わせた。
するとレナードが声をかけてくる。
「大丈夫ですか？」
「あ……、申し訳ありません。少し悪寒が……」
「それはいけませんね。室内で過ごしますか？」
「いえ、せっかく秋薔薇が見頃だと教えていただいたので……。できれば拝見したいです」
(室内で過ごすより外のほうがマシな気がする)
そう思ったので、エルシーは庭園での散歩を選択した。

◆　◆　◆

王宮の薔薇園はとても見事だった。
アーチ状に仕立てた薔薇が庭園のゲートのようになって、そこをくぐると色とりどりの薔薇が咲き乱れている花壇が現れる。

中央には大きな噴水があり、水面には白とピンクの薔薇の花弁が浮かべられていた。
「噂には聞いていましたが素晴らしいですね！　連れてきてくださってありがとうございます」
演技ではなく自然に笑みが零れた。
「王宮の思い出が少しでもいいものに変わってくれたらと思ったんですが、お誘いしてよかったです」
レナードはにっこりと微笑みかけてきた。
「舞踏会の時のことなら嫌な思い出にはなっていませんよ？　父と踊れましたし、お食事も美味しかったので。純粋に嫌な思いをされたのはフィオナ嬢かと……」
「そうですね。王宮の警備に不備があったせいで、彼女には怖い思いをさせてしまいました。衝撃のあまりの大きさに臥せってしまわれたそうで、気持ちが落ち着いた頃を見計らって手紙を出そうかと思っています」
レナードは眉を寄せた。顔が良いので、そんな憂いを含んだ表情も麗しい。
「キース・ライセットは、貴族籍からの除籍とライセット侯爵の管理下で幽閉されることになりました。思いつめたとはいえ、愚かな真似を……」
「私もそう思います。王宮のような場所で女性に暴行しようとするなんて」
「いっそ人目に触れればいいと思ったらしいです。傷物という噂が立てば、まともな嫁ぎ先は望めなくなる。どうやらかなり精神的に追い詰められていたようですね……」

「酷い……」
エルシーは絶句した。
すると、レナードが眉を下げて力ない笑みを向けてくる。
「彼のことは一旦忘れて散策を楽しみませんか？」
「そうですね。せっかく殿下にお誘いいただきましたから」
エルシーはレナードに同意した。
確か小説では、普通に会話のキャッチボールが成立したことで、レナードはエルシーに魅了が効かないのではないかという疑惑を深めていったはずだ。
ほかの令嬢は、魅了の魔力の影響で彼の全てを肯定してしまうため、会話が噛み合わないらしい。
だからこそ、まともに話ができる家族以外の女性に驚き、レナードはエルシーに興味を持つようになる。
（レナード王子はすごく可哀想な人なのよね。それに推せるキャラクターだった）
魅了の魔力のせいで幼少期は酷い目に遭い、成長後も自分を持ち上げる人ばかりに囲まれる。
歪んでもおかしくない生育環境の割に、両親や姉から深い愛情を注がれたおかげか、レナードは優秀で真っ直ぐな青年に育った。
しかし家族以外の誰も信用できないという孤独を抱えていて――小説のエルシーは、それを埋める存在として描かれていた。

だから、レナードに魅了されている演技をするとチクリと心が痛む。
（でも、私は小説のエルシーじゃないのよね……）
前世の記憶を思い出した時から、エルシーは何も知らない子供ではなくなった。
汚さや狡さも持ち合わせる大人に変わってしまったのだ。
レナードは素敵だと思うし、小説通りに立ち回れば彼が手に入るのかもしれないが、そうなった時に周囲から向けられるであろう嫉妬が怖すぎる。
（王子みたいに煌びやかな男性は遠くから拝見するのがちょうどいいのよ。だからごめんなさい）
心の中で謝りながら、エルシーはレナードの隣を歩いた。

庭園を見終えた後は、サンルームにアフタヌーンティーが準備されていた。
どうもこの小説の世界観は近代のイギリスを参考にしているらしく、人名やら食べ物やらに何となくそういう雰囲気が漂っている。
午後にお茶を楽しむ文化もその一つだ。
そのおかげでこの国は紅茶とスコーンがやたら美味しいのだが、王宮のものは格別だった。
「そこから見えるブランコ、実は二代目なんですよ。一代目は子供の時の俺があまりにも激しく揺らしたせいで壊してしまいまして」
「子供の頃の殿下！　きっと元気でお可愛らしかったでしょうね」

「いえ、くだらない悪戯ばかりして母や乳母を困らせる子供でした。市井の言葉で表現するなら悪童です」
「まあ……。でも、そんな姿も愛らしくて素敵だったのではないかと思います。もし時間が遡れるなら、その時の殿下にお会いしてみたいです……」
全肯定を心がけながらの会話はとても疲れるので、甘いものが身に染みる。
(このスコーン超美味しい。クロテッドクリームと合う……)
エルシーはにこにことレナードの話に相槌を打ちながら、はしたなく見えないように気を付けて軽食を口に運んだ。

「――そろそろお開きにしましょうか」
訪問から一時間半くらい経過した頃だろうか。
会話が途切れたタイミングで、ようやくレナードが面会の終わりを宣言してくれた。
「はい。とても名残惜しいですが……」
エルシーはしょんぼりとした顔を作る。すると――
「では、また誘ってもいいですか?」
レナードがそう発言したので、ギョッとして目を見張る。
「駄目でしょうか?」

立ち読みサンプル
はここまで

「いえ! あの、驚いてしまい……。殿下にまた誘っていただけるなんて、思ってもみなかったので嬉しいです」
エルシーは慌てて笑みを浮かべると取り繕う。
「本当に、本心からそう思ってくれていますか?」
「えっ」
さらなる問いかけにエルシーは固まった。
(いけない)
二連続で意表を突く質問をされて、思わず驚いた顔をしてしまった。
レナードの透明感のある紫の瞳は、何かを探るようにこちらを見つめている。
エルシーはその視線に気圧されながらも、どうにか言葉を紡ぎ出した。
「も、もちろんです。殿下から誘っていただけるなんて、とても光栄です……」
(まずい。これ、絶対に不自然だ)
青ざめるエルシーに向かって、レナードは口角を笑みの形に釣り上げた。
「本当は乗り気ではないのに承諾したのは、俺の身分のせいですか?」
(あ、駄目だ。バレてる)
エルシーは察した。
(どうしよう。どう答えるのが正解なの……?)